

「3・11 風化させない」 避難者から震災体験聞き取る



冊子をまとめた渡辺美恵代表の「生活企画シエフリー」のメンバー。西東京市で

西東京市で活動するNPO法人「生活企画シエフリー」の女性五人が、市内に避難した東日本大震災の被災者十二人から聞き取った内容を冊子にした。タイトルは「3・11の現実—そして、私たちはこの町にきた」。恐怖や不安、葛藤、怒り…。文章は素朴で生々しく、避難者本人から直接、話を聞いているように心に響く。
(梅村武史)

西東京のNPOが冊子刊行

三月十四日午前十一時。修羅場を見る思いで、近く、福島第一原発からモクモクと白煙。誰かが爆発した！と大声。「これで家には戻れないぞ」。不安を口々に泣き出す人もい

三月十四日午前十一時。修羅場を見る思いで、近く、福島第一原発からモクモクと白煙。誰かが爆発した！と大声。「これで家には戻れないぞ」。不安を口々に泣き出す人もい

た。宮城県女川町の東海敬子さん(60)は、石巻市立病院で働く夫を津波で失った。安置所を訪ね歩き、遺体と対面できたのは震災から八日後だった。「花弁市場の安置所できれいな顔のままの夫と会えたんです」
がん治療を受けながら避難生活する女性、保育士として園児を守りながらわが子の安否に揺れた母親。冊子は、過酷な体験をしながら



「3・11の現実—そして、私たちはこの町にきた」

取材を担当した五人は五十一～六十代の主婦だ。二人組で避難者の元へ何度も足を運び、通算十時間以上を取材に費やしたケースもあった。代表の渡辺美恵さん(60)は「あの日を風化させないために」という思いだけで、素人だけと頑張った」と胸を張る。
冊子はA5判、百二十二ページ。売上金は経費を除き、東日本大震災女性支援ネットワークに寄付する。問い合わせは、渡辺代表 電042(467)2089へ。